



芭蕉發句

讀業亦全

上部春



序一

叙

浪きり飛き川乃倒流いももの
よく我はふとそと流きらるるあはれ
る者いふまじく世のいふ心まのた今
にハたあゝのあゝへ一絶路よまらぬ
まよのおし浦乃深のま藤もくさくなる

中よ古人のまはしむるも
或は詠諧と名づけし
きよちのいへる近代よ
飛流のいふ詠と
乃らりたといふ詠と
ふかき初一法といふ
の連歌といふの世も
いへる今といふ
とらるるまじりたる
母よなご河ある
比よ山陰乃宗鑑
并流乃流えい
のちも

却乃貞徳のそまを
一芭蕉といふ
その貞徳の流を
一法下事吟に
傳へしおのそま
いふ詠に
かゝるわの中流
母乃祖流を
いふ詠の
ありき
いふ詠の
ありき
詠の
ありき
詠の
ありき

笠一製曾無長物朝遊上
苑夕到荒邨朗然胸次思
無邪乃不識錦囊之重者
也所謂不得天下之至美
與至樂而樂者非耶白駒
既過而不息積有弓曰芭

次序二

蕉集近來其注疏出之三
部曰師走袋曰評林曰句
解斯不知翁者所為而唐
突西施刻畫無鹽惜哉金
篇玉章變作瓦礫一旨引
衆旨莫甚焉古云解之愈

增スミ惜ミ懂ヲ者耳於テ是ニ葛飾素
堂第三葉絢堂君素丸俳
林翹楚詞海長鯨為ス之カ忼
慨夢寐於スル桃君十年于茲
涉獵百家于レ神于レ儒捃摭
掌故始メ功ヲ一簣九尋已ニ成ル

次序三

殺青五卷名曰說叢大全
嗚呼可シ謂ツ淘シ之シ汰シ之シ勤ク矣ト
擲ツトキハ之ヲ則レ錚然ト有リ金石之聲
既ニ讀テ而從來之ノ三解ヲ瓦解ケ
氷消ス秦鏡當テ臺ニ妍醜無ク所ロ
逃ル胡漢自ラ分ツ點竄有リ日隳

括之極矣。是實后世之典
型。天今降穎素丸君。回蕉
門既倒之瀾。獨得桃君感
發之真也。六義即粲然。鈞
槩之功不在禹之下。不亦
愉快乎。予先人桃翠。昔日

次序四

遊于翁門。從事於此。有年
不忍。愬然棄棠蔭之遺愛。
故丸君被屬。以序謝不敏。
不可。予以先子之號。亦嘗
丸君之所命也。於是乎古
毛州陳人那須桃翠。序於

東都感應樓

皇 蘇明和辛卯夏五月



蕉翁發句說叢大全卷第一

總論

古人の曰一書を得て證とも不足なりと。先達明師博才。碩
 徳の人乃書多しむハ一書あてもたり多し。其餘ハ近來の輩此
 之何也。爰に芭蕉翁の發句もこ也。或ハ注し。或ハ評し。何
 ひも解し。其も三部あり。いんも教。師走袋。評林。句解是也。
 ほしく聞きた。何れは誤り。或ハ邪小。あるは解を摸羅含棚
 あり。又蛇足張添ふもあり。其中に至て邪妄するハ師走袋
 よる。故よの如し。注林通例のりあり。其文意りきか。死之多
 し。句解。ねほね。其新を得たりと。足ゆき。證平。あま

也。亦さる。俗も粗見え。解みあやうき。俗も亦有り。志う進た。今の人は。あなの人。その誤りを借(交)ひて。翁よ對して。いふやせん。今志げらく。樗也。黃帝をあらう。三部の爪突を正。又ハ正解たるハ賞。方明なる。いづらうに。いふ。いかに。へ乃事。今よ。あやうき。知。か。地。有り。も。い。の。明鑑を俟。師走袋の序よ。今代の人翁。餘流を汲といひ。志う。翁う句意ハ寒。夜よ。啼。蚕の。枯木。お。移。れ。は。ま。を。安。あ。い。を。計。り。知。人。稀。也。い。え。翁。の。句。意。を。知。り。て。翁。の。門。た。く。俗。人。の。む。と。管。見。蟲。測。を。顧。して。翁。う。句。中。ふ。世。人。の。通。曉。し。う。此。もの。を。取。て。是。う。注。を。あ。ず。と。い。ふ。然。れ。も。翁。の。句。意。を。知。り。注。

といはらく。又。翁。を。賣。て。お。の。れ。が。邪。也。を。弘。め。し。と。す。る。も。の。也。先。ま。い。の。ハ。蓬。萊。の。初。使。乃。句。注。に。伊。勢。海。老。汝。ハ。伊。勢。乃。産。あ。れ。と。知。り。あ。ら。う。は。い。う。あ。ら。や。海。老。も。い。ふ。答。へ。ん。や。其。外。麻。よ。掉。の。こ。と。地。安。曲。あ。る。百。よ。一。を。注。し。何。れ。小。ふ。皆。古。人。の。誕。を。あ。り。ぬ。世。に。い。て。は。す。く。翁。の。句。通。曉。し。翁。き。もの。多。く。後。人。を。迷。と。事。甚。し。古。來。より。和。歌。の。俗。注。あ。り。か。俗。事。多。う。り。西。の。鴨。川。の。鴨。を。死。木。也。平。都。婆。の。事。を。い。ふ。又。於。政。の。衣。あ。り。り。を。天。晴。と。自。慢。の。う。に。注。し。或。ハ。志。あ。ら。う。系。乃。は。し。も。ら。を。志。あ。ら。う。系。ら。三。界。六。道。と。い。は。し。と。系。を。い。一切。衆。生。と。い。ふ。と。い。ふ。観。世。音。地。詠。を。い。ふ。と。い。ふ。か。俗。の。

を附會しんらん。又平の忠度及び勇士の又文字を、行末を
と。解もてん然。是等の及逆人の流あり。かりとめをり。な
より。古戦よりみち。のち。ち。す。世も。憚る。なき。事。や。
爰も。木曾の雪解乃句を。義仲の勇烈も比し。正
統なり。人の人。思ふべし。

評林は多く世の知りぬる一通り。正小の。粗見解の
遠い。り。競の。此梅の。とき。理。無。解の。海。と。云。中
多く。古平を。出。す。は。又。い。や。り。翁句を。鑑。考。
も。及。ん。て。古歌を。名。て。業。も。有。り。又。古歌を。ぬ。す。一。特。
た。も。り。風。と。吟。む。句。自。然。と。古平。み。か。あ。い。る。色。の。一。向。

總論三

よ古歌古事ふ奇。後。俳諧の句。有。句。毎。よ。か。ち。古
歌を。り。て。業。も。亦。煩。り。翁。乃。乃。心。何。ぞ。か。
の。僻。念。り。も。や。と。き。あ。り。ぬ。句。よ。や。古平。を。今。を。評。ま。
ハ。雪。白。翁。の。意。我。破。家。も。の。ち。か。と。る。翁。

評林と云ハ。史記評林も。漢書評林も。諸史百家の評を。あ。ま。と。あ。を。集。め。て。林。の。ど。と。
多。く。を。り。何。ぞ。や。一。己。の。評。を。り。林。と。い。ん。も。亦。題。意。の。た。ぐ。り。と。云。り。し。
句。解。ハ。三。部。の。う。ち。あ。て。尤。一。く。奥。旨。を。得。り。し。は。是。と。
粗。瓜。は。き。り。て。儲。る。古。事。古。奇。等。引。用。能。る。是。を。
亦。翁。乃。心。骨。不。あ。り。坊。て。證。平。の。り。翁。も。海。も。一。く。は。
又。其。句。の。餘。情。を。解。も。した。免。古平。用。か。り。有。り。け。と。
中。引。用。能。る。齟。齬。も。も。色。も。あ。い。だ。又。後。の。人。は。迷。ひ。ぬ。

三十餘年にしていす。敬体を原。二より乃排者をまて。懐心
みゆ。只唯。真の翁を腹所み納め。は。排うそ。中。誰う疑
り。此後ハ。翁の靈前に。一筆一香を。は。げ。一字一淚の。海
ちりし。人。る。推。き。よ。

爰に。又。二。子。の。ふ。翁。を。正。風。眸。中。興。乃。祖。師。也。句。を。活。と
し。ハ。意。外。と。唯。之。活。し。て。過。多。と。此。多。温。和。な。る。に。以。て。心。と
も。い。ふ。し。る。を。万。葉。張。け。也。勅。撰。の。代。の。和。歌。帝。王。后。皇。也
は。い。ち。を。ま。る。人。麻。呂。赤。人。の。こ。と。也。聖。仙。の。詠。も。心。敬。宗。祇。
契。沖。は。り。と。より。季。吟。山。井。を。こ。る。の。代。の。地。下。地。分。子。者。た
ち。い。つ。れ。を。注。し。て。後。人。の。い。ち。め。と。な。す。と。い。つ。て。憚。多。し。と。や。と。ん。

之。の。是。た。そ。し。け。る。也。も。又。も。世。乃。鑑。と。も。目。わ。ら。ま。ぬ。也。
れ。や。も。志。の。ぬ。へ。ら。ん。と。い。は。も。や。の。思。ふ。毎。か。ら。ん。や。排。者。
排。諧。な。る。や。二。子。も。ま。る。古。く。こ。と。げ。家。也。は。ん。
近。來。も。我。門。派。の。排。諧。を。危。角。に。禅。意。を。り。て。解。し。又。は
禅。者。を。り。て。附。會。し。て。望。理。無。幹。に。禅。門。へ。引。入。む。と。す。る。も。粗
ん。ん。と。り。是。甚。と。い。ふ。翁。ハ。佛。頂。の。身。子。め。い。禅。よ。熟。と。り。
そ。餘。力。を。り。て。季。吟。に。排。諧。を。お。し。正。風。眸。も。熟。せ。り。と。い。う。い
乃。た。め。た。縁。を。ま。り。は。縁。の。う。め。ハ。排。諧。成。習。す。る。も。ち。く。也。を。理
事。の。二。つ。の。ま。り。に。お。る。也。風。雅。の。句。め。を。理。の。ま。り。に。お。る。
か。え。よ。賜。け。と。と。ん。の。可。ら。ん。排。諧。ハ。禅。を。い。ぬ。と。せん。と。い

軍のいふ。あつむ。世よえ。詩や。禪や。誄や。禪や。とらふこと
或耳にすて。ゆえ思ひ違つる。あや。乞ひ。そと。海の。ぬし。と
よる。ふ。也。

渠を憎むとて。記すふあつむ。是。我。善。あ。ひ。と。え。説。よ。り。と。は。
よ。き。の。天。地。よ。り。能。く。あ。つ。む。は。つ。比。よ。り。悪。し。く。は。正。理。の。志。の
ら。し。ひ。所。古。の。普。通。也。唐。土。の。刺。孟。疑。孟。の。云。り。偽。に
難。存。捨。遣。難。ふ。載。を。と。り。必。し。色。に。説。叢。を。足。ん。人。の。能。く
う。み。ゆ。ふ。能。く。す。我。の。と。り。井。鍾。狭。識。を。不。誤。り。多。か。ら
ひ。信。の。君。子。ま。う。出。て。訂。考。せん。事。を。希。の。い。

以上八條總論終

凡例

一 袋 云と此もは。師走袋の流を挙る也。

一 林 云と此もは。評林の流を挙る也。

一 解 云と此もは。句解の流を挙る也。とらふ。と。也。益。さ。う。
し。事。長。き。の。略。と。本。書。小。併。え。る。處。し。

一 説 とハ。予。の。管。見。也。記。し。外。古。人。の。實。記。或。ハ。實。録。古
集。等。に。載。在。せ。る。句。評。を。り。を。挙。て。證。と。し。又。ハ。翁。の。云
録。よ。り。て。正。し。む。り。又。書。名。取。り。と。り。り。也。ま。さ。も。り。り。多
し。出。所。等。と。し。ま。を。要。と。し。諸。名。家。の。説。を。あ。り。お。め。い。て
説。叢。ゆ。て。大。に。全。し。こ。ハ。名。對。也。

蕉翁發句說叢大全卷第一

葛飾

素丸著述

同

南臺檢校

春部上

年々や猿よりきせし猿さるの面

袋 云是ハ世人のいふ如し業は果しあく日也多事年ハ積ま
 るも前よきるるより色あく唯猿小猿の面也着せし猿之と多
 とへ乃多也 **解** 云按さるるに六意一獼猴の心也通（家死只人乃
 心の彼より移り是亦多事生死無為の乃理也）猿（猿猿より面者

○卷第一

とくは柳よ先の向ふうとつる翁の親あはし七様の分無益或人云と世哉

翁生辰後光明院の御宇正保元年甲申依て此吟ありと此説

理屈ありて云終許六の風俗文選に引説林 此句で出さず

○説袋 すすかやういどいさやいぬものし解 親想あつてかりて

常の浪凡此句にあつゆる古良詩弁を摘みかぎり。廣大無辺

ふいりんお浪りあなうらうらうて皆脇道のつらぬくに臨

まうらうのこころにむけうきまよあらず。目前今日のま

無常よれと評さむいりてうらうらう浪。○去来抄曰世白いつれの

折る葉旦と聞ゆらんやと。翁の曰とらうらうらうらうらうらうら

ハッとして退きぬ。云云。○古今抄よ云。世白いふり。に。迎年

乃言ハ籠れうらうらう葉旦の泡さげまど。是ぞも難の解

とやいともむしき云云。○百菴が万々葉に云。年々歳々人不同花

相似と云ル可乎と云。是ぞもいさげうらうらうらうらうらうら

是も親想の難お浪り。○近來紙徳が翁の云編を以て

十二月の翁あり。葉尾の句と云文(わらわは)は句ハ葉を以て

なりと云。紙が方よハ葉を以て是らうらうらうらうらうらうら

て云稿のすまおハ葉の此海らうらうらうらうらうらうらうら

且吹らうらうらうらうら葉を以て句と云文(らうら)も知るらう

ず。近來偽筆と云。影。信用。かじ。葉旦を以ては必

定也。○往年甲初の稿中菴黒露に同よ曰世白りて此所

後き〜〜か〜〜し **解**ハ好のたふさばらく撮ありとらぶも
 後戒口の平れも〜ハ位高きと活喻一語ハ〜也。此句は
 元日の朝ほ〜り乃更〜死風情を〜し。此句は一歩千里
 此遠の〜し。又形を〜し。〜し。此句ハ〜し
 ず。詩平ふ〜し。○白氏文集に唐の延陵妾が容を祢
 羨せ〜詩有りて。端正容貌若陽春とあるより此句ハ
 ○句意ハ元旦の曙乃を羨〜人物の威儀正〜風情ハ
 又延陵妾が姿に似〜と。一語〜俳諧一道の活法也。此樂天
 が活有りて。和尙の活喻もあ〜し。翁の句。その〜し。
 けひ〜し。此句ハ〜し。初更振を〜し。後〜し。

遠き張は〜し。おのが女を誘ふ〜し。翁の心骨あり〜し。山
 翁集白氏文集ハ翁まけた後あ〜し。勝えの〜し。
 全篇も〜し。翁や〜し。人ハ〜し。此句ハ〜し。
 〜し。

誰人々 蘇き〜し 在いまと 蘇乃 春

解

云孫農字元公

下略

袋林

此句と出〜し

説 孫農が事一向〜し。古々〜し。人〜し。限あ〜し。
 蘇〜し。兼好ハ遊戯〜し。
 云句の引〜し。

胸中知るるを強し予のたのむるを既よ。○涼袋が片予二夜
 同答あり云。世の人初春のたのむるをいつきも何となく此衣よ
 留るる中に薦かひうら着てある人も何となく非人の薦か
 ていばともすも又豊なる御代の春に非人の薦を着て
 居るしいつきも新暇みよふ海ありしともすも此海に句
 意の事ありあはれ在の詞下賤れ者に對してはうと何り
 知らぬ中畧して近比色蕉句解といふ冊あるをよむ孫晨の
 半を引ていふ大かあるはり孫晨の事を作ると非人の
 並座きや又梅庵の眼もたふ句作をかくはうりよと何
 う響うじと云。○右の同答の多はいはすの詞下賤れのみよ

當らぬといふを長くいふは如。此作者は亦此句乃婦よえ
 へ知るるを免えり。句評もさうとあらを搜して一向何と
 らんぞ。燕着るといふはともや。非人乞食の思ひは浅くは
 非人乞食にいはすの詞をいふ。何れとやと保くさるや
 又如く。偏僻乃論者と。世に并つて也。在の詞み心つきか
 ば早く知りぬ座き也。○馬光家書の内。素堂夜話同云
 み云。我素隱士也。此句を同。素堂答て曰。是はこれ。片是山
 の餓人也。十二月に吾子對面あり。歲旦も酒をうけ。橋の
 りよの乞食をうけつけ。何となく思ひ出して。吟せし中。箱
 もはらばの物語あり。此と如此澄説の多あり。其後す。秘夏

ちりとりども。初軍を迷りての涼の歎り。一に。はまがて
 影す也。信して敬も。一。黒露回解。回解も。に依る。いほ
 との詞よく叶つりと。え。下。下。下。似合。作。人。小。春秋傳也
 よませ。一。足も。執くる。一。一字。れ。衰。敗。と。つ。こと
 だも。心。づ。つ。り。り。り。○日本紀曰。推古天皇二十一年。冬十二月
 庚午朔。皇太子。旌行於片岡。時飢者臥道垂。兵○元亨
 釋書曰。推古二十有一歲。十二月朔。太子過片岡。見飢人。兵
 之。の。為。涉。や。す。む。と。四。友。の。あ。り。て
 酒。魚。一。も。依。よ。元。日。れ。登。ま。て。休。て
 曙。ん。も。つ。り。り。り。

二日少色ぬうりいせ。か新乃春

林 云々。の。氣。情。を。う。一。元。日。の。新。寐。し。て。一。と。せ。の。曙。を。ん
 ち。う。り。り。の。強。者。乃。境。東。と。二。日。少。色。ぬ。う。り。い。せ。と。い。二。日。少。色。胡
 麻。一。と。珠。の。解。を。思。ひ。あ。る。世。に。泥。濁。の。変。を。以。て。屈。原。の。腸。を
 採。り。て。心。を。下。ぬ。う。り。い。せ。と。は。白。氏。文。集。勸。學。計。一。年。有
 陽。春。と。每。益。を。れ。と。袋。解。此。句。を。出。さ。し。候

說林 の。世。深。文。意。例。の。摸。羅。含。糊。か。し。ん。わ。り。り。ぬ。う。り。而。を
 ち。え。ん。ん。音。より。友。の。あ。り。て。酒。興。一。翁。を。か。ろ。解。て。は。し
 一。麻。終。よ。新。寐。し。て。登。ま。て。起。り。酒。醉。し。て。ぬ。え。是。の。意。を

閑樂のこぼれて世にかりぬふえ。と目えてぬくや
きけいとせのぼりぬれ曙をえんがけりよよ。としく二日
とてぬくりのせ。曙をえんがや。二日とてぬよ。とむの春よ
てとあやと。凝滞をぬかぬ心の程を黄きぬ。ぬり
いせ。かひゆゆのぬと云ふぬ。爰を俳諧の活前と云や。
林深のぬきり。けいお森。とてはぬす。さい今時の
やが。家賣僧侶者のさほりて。翁のふんよ。多む。ぬあ
け。け。ぬ。是。ぬ。と。よ。味。ぬ。の。廉。評。と。又。屈。平。賦。に。け
る。事。ゆ。ゆ。と。渠。の。忠。誠。の。大。臣。と。桑。門。の。類。い。よ。あ。ぬ。と。志。氣。
雲。泥。懸。隔。の。た。ぬ。い。と。は。是。の。百。菴。か。ぬ。と。翁。よ。課。罪。と。い

と。と。と。と。又。白。氏。の。詩。を。り。ぬ。り。の。と。の。評。ぬ。の。似。て。も
あ。る。故。古。語。一。歳。計。在。元。旦。と。云。語。也。白。氏。を。り。用。い。し
と。河。を。り。ぬ。り。の。と。ぬ。と。い。ぬ。や。と。ぬ。と。ぬ。り。し
評。之。下。并。

か。う。ら。い。り。す。と。や。伊。勢。乃。初。便。也

袋 云伊勢の初便のききたるゆゑも元日ちのきとすとの賦詠一章
逢来亦有伊勢海老伊世の事い知下渠小ありともすもやと
林 云茲詠の奇にけ妻をいせよとる人ち信て後婿しき花林も
世予やもあしして何とぬく林も橋を向中ありて逢来もやと

らど我をえとて集む。

○説 慈鎮の燈并書、出たがひあり、びあつてつる、いふ此誤也。

○拾玉和歌集 慈鎮の 第四、賀茂法樂、詠百首和歌、夏十五首

のうら、けしび、ハワセにふる人といふ、此并、何れもふし、

何れもけしび、法樂乃年月もあはぬ、

又類句あり、後のと出、使ふ、

○家集を證とも、家集 ○百菴が万々葉に記せしむ

拾玉集より初句けしび、

今さらえ、

慈鎮和尚の真跡乃一帖を爰見して、は度り小決之と云○

柑子の夏 橘ハ、日本紀あり、垂仁天皇御宇、九十田道間守ヲ

世倍、田道間守を名と云、ハ、常世國へ遣られ、橘をりて、

る、あまのぬく人の初り、

来りしハ、神亀二年十一月己丑、天皇御大安殿、受冬至、賀

辞ラ中文 典鑄正六位上播磨直弟兄ニ並授從五位下弟兄初

賣、其子、從唐國來、虫麻呂先植、其種、結子、故、有、此、授、馬、

今とちりて、種、の、うら、あ、

く、異、ある、の、と、本、草、を、考、是、ハ、橘、ハ、小、く、一、味、も、各、の、り、

ハ、や、大、し、て、味、の、鹹、く、ハ、や、ん、其、子、と、ハ、

可謂遺恨乎と付海にさりいづれ。昔年を解へて存け白の
 解をりて命き小と。思われ付を。箱中菴黒色をかくいつき。
 我の年の未解（孫と黒色をいふ）疾。尋ひ付りし。小。後返
 して云りぞ。と。去りて是能みと。い。か。と。す。こ。い。り。と。む。の
 里。我。物。持。て。し。と。和。年。画。豊。多。り。小。屋。き。と。り。何。と。と。必
 沙。持。す。と。い。い。し。老人とに。か。め。と。今。度。き。も。影。し
 孫。し。翁。の。句。と。ん。と。初。後。き。は。伊。勢。の。後。り。あ。と。地。而。の
 後。り。の。行。く。と。ん。と。○去。来。抄。小。云。你。川。の。文。よ。此。句。は
 是。の。の。語。り。汝。い。は。す。持。く。や。と。去。来。曰。都。古。の。後。り
 と。あ。と。す。伊。せ。と。持。く。は。元。日。の。式。乃。今。様。と。り。ぬ。小。神。代

を思ひ出さる。後すとも。乃祖神のとも。胸中をさかかす
 分とくとも。水り持くとも。翁曰汝す亦。ぬり。次。今日神祇乃。
 か。く。後。り。と。と。い。い。ぬ。と。是。鎮。和。尚。の。御。水。と。り。初。の。一。字
 を。吟。し。お。し。持。く。と。なり。又。踏。去。に。伊。せ。よ。と。人。都。つ。り。て
 後。り。の。き。と。是。鎮。和。尚。の。よ。み。持。く。便。の。一。字。を。出。す。御。音
 の。あ。は。た。す。と。す。汝。う。す。清。浄。の。こ。り。と。神。祇。乃。か。く
 後。り。と。り。と。達。来。よ。對。し。と。結。ひ。と。と。汝。う。す。亦。重。也。と。云
 此。説。秘。藏。と。り。と。い。ふ。も。妄。説。は。く。と。い。ふ。初。孝。の。迷。ひ。多。け
 き。ハ。此。一。出。ぬ。翁。の。自。注。も。同。と。す。心。を。是。を。り。つ。て。正。證
 乃。句。解。と。り。と。い。ふ。一。穴。賢。と。り

しといふは。何のゆゑに此もや。梅はりて少婦貞女
比する例。古今詩多し。奉るにゆくはあり。

神垣やおもひもかけは涅槃縁

林 云伊勢の日本神社ありておかけなきは一川ありぬるに
青統よ入ておひもかけは涅槃の法今を指しかる神垣の
事と示佛法の希も現世未來を兼し句意成へしかる
神恩もまゝ佛恩の方便もいつまも希も何とてか
よりお成さるにすはりぬらもけとて未來此の
るしおれは妙なりとありはもといふぬらもけ

さみ洞のゆゑに深きを丁尋也 **解** 云金葉神垣のゆゑに
とありとゆゑにす此もけいぬらもけの希もけいぬらもけ
て無き迅速の白情ゆゑ **袋** 此句出さる

説 **林** 一通りのゆゑに希もけいぬらもけといふ。未來の心
こもは。一糸と入りぬらもけの妄法也。和歌連なり。三世のるをば
古き連俳集要とてる也。三世不可得の證句なり。き色
より。かたしゆゑに地理屈は持てる。ゆゑにちりき縁。夕顔や
秋いつらくの熟ぶの白き。色現未乃三世をこめりといふ。
とむらもけいぬらもけ。理屈は風雅の海ふあらず。入涅槃の誤也。
何とて檢校もきどし。梓よ新しき兼末。又何とて

梅々の風情この宿乃とらん汁

袋 云卅句乙州東武行も饒しその句也 中略 句意は東武は

名物をかくして面白時の季を出さる好士のくまは注を略す

林 云上畧旅を去る人の名不これ風流を一句よ案内はとて

送るは是風雅の友は志を去るはさるふく **解** 云乙州大津

より東武の饒別は梅を去る青白の色立ゆして是これ風流

さるふく 中畧 句三段切 口受

説袋 東武の名物で送るはと云はぬく入らばとやいと

心又面白時の季を出さる好句やいと何れもは是布の文

意也 **林** 俳友の志といふふく 乙州 此才子ありてな

あはれど卅旅りの時寂より史邦へ送るは案内可持と云

門才の文解 真跡集ニ出たり **解** 大よ擴ゆり然りと云はる色立乃

事い全く世の好まふくは寂は心なく梅々の分と尚季

を去るは案内は送るは案内は案内は案内は案内は案内は

又、菟弱よりい賣るは案内は案内は案内は案内は案内は

や晴き柳の及緘は案内は案内は案内は案内は案内は

人を海どのす案内は案内は案内は案内は案内は

○句意は梅もおらと云はれは案内は案内は案内は案内は

に増へ鞠をれ宿もは案内は案内は案内は案内は案内は

すがら乃心で慰めながら。一息をいふは。無益の後つゝふを。著
る。いさむふ。表わつゝと旅をいふ。示誠をいふ。是れ。是れ。是れ。
の心骨也。能く可考也。○三段切口文とられども。古き抄よき
傳へまゝ。一度入し人へ解とる。一。

三段切

目よき。紫。山。い。き。ん。初。體。
梅。よ。紫。は。り。この。花。の。と。り。け。

○再撰貞享式云 前略 前章ハ素隠士ハ鎌倉の吟りハ世句
の稱も。而ハ目小と語勢をいふ。詩ハ耳に口にと心で極く
め。い。は。ら。の。影。畧。互。見。の。法。い。は。り。是。等。を。三。段。の。切。と。ま。す。下
は。ま。い。来。り。の。能。別。し。る。と。う。く。此。優。遊。の。梅。も。い。り。ま。す。其。也。

何り鞠子入菴小いさる。汁も何れんと。い。や。り。い。は。風。情。を
う。ゝ。あ。か。い。植。物。と。食。類。と。に。結。前。生。後。の。働。あ。り。て。さ。ら。ゝ
ハ梅わりのかの。は。や。で。あ。も。十。成。の。俳。諧。賦。也。是。等。を。三。段。の
女。節。と。い。ふ。早。竟。ハ。句。中。に。切。字。を。い。れ。も。是。れ。と。ま。す。
差別をいへ。三段ハ例の三列。さ。ら。ゝ。や。い。句。源。よ。益。あり。と
い。ふ。も。初。案。也。口。傳。く。く。迷。り。し。る。を。歌。ま。す。今。又。此。一。ぬ。
ち。あ。ら。う。や。ま。も。こ。お。ど。ろ。く。琴。の。麿。

林云。簫の夏に春鶯啼の曲。何り。是ハ秦。始皇の。所。蒙。恬。と。い。ふ。系
人。初。ハ。此。り。い。は。ぬ。也。詩。小。ハ。林。鶯。何。處。吟。簫。挨。嬌。柳。誰。家。曝

此二字を誤り不解

麴塵解云是ハ樂器乃画讃也劉向別録曰魯有善歌虞公飛
聲清哀拂動梁上塵ハいふゆゑなりとの梁上の塵をふるふ
をいふなりハ倣猶のよまを千鍛を稱するハ袋け句を出す

説 **林** ハ妄注年より鼻ハ出ると云塵ハ又文多のハ
まゝをいえず又春鶯啼の虫暗夜に磔ハあぶらハ籥ハ和
名抄風俗通云舜作籥ハ先堯及和名籥ハ和名抄風俗通云
神農造籥ハ籥耕及倍云ハ或曰蒙恬所造秦聲也といふ籥ハ
籥ハ混雜するや琴の句に籥の注齟齬せし又詩も
と云ハ詩經の外ハ云ハぬ事也誰の詩集にも此ハきき法を
そととらばやきくハそ引用を詩と示すハゆやゆり

○白氏文集二十卷八卷 天宮閣早春律詩 天宮高閣上何頻
每上令人耳目新前日晚登縁看雪今朝晴望為迎
春林鶯何處吟笳柱檣柳誰家曬麴塵可惜三川虛
作主風光不屬白頭人ハハ全中せりて出と七ハ笳ハ挨
といふのよめやいふハ此二句何れハ世ハ白何れハ
いふやいふハ意をたまふぬやうたて柳ハと云句ハ
引なきや又琴の塵と云ハ解ハよめまたハ麴塵ハ
の事ハもと附合せハハ麴塵ハ黄なるやうハ柳の
まゝまじりてなるはハあま黄なるにせしハそれを鵝黄とも云
天皇の御衣ハ色きくちんりりハびと堂上の人ハ着ゆゆ

るさし。只美人の抱頰しえさうらうし。梳のうらなはさきくさるる。高家の梳をさのうらりやう。心遠くあや。いつきあも。評林の誦大にたがひて。危角云あも及ぞ。解劉向別録の語相遠なり。然れ共世書ハ。今の亡嗣たわハ。そ全書るる人あし。只あよ引たる也。るるのそちわハ。少異ハありぬ。る。然れども此虞公が古事ハ。こよあ考れよ死と云る。今こ世あお舞妓浄るりに。かこ人と云あり。強人と云ある。ごご。虞公ハ。颯ハ人ハ。樂器のよあはあ。ハ。は。句よハ。心。は。く。く。のよ。り。ぬ。え。志。う。ま。も。も。樂。器。乃。濛。と。眼。の。つ。き。た。る。可。い。當。れ。り。去。あ。う。う。世。樂。器。ハ。あ。ふ。あ。う。ら。ん。と。こ。こ。こ。

をけぬくと。可惜うら。○予按。どうた。此句は樂器ハ。必し。と。琴。う。ち。う。へ。と。琴。の。古。事。あ。う。う。と。○列子曰。瓠巴鼓琴而鳥舞魚踊。○史記^{二十}樂書第二曰。晉平公曰。寡人所好者音也。願聞之。師曠不得已。援琴而鼓之。奏有玄鶴二八集乎廊門。再奏之。延頸而鳴。舒翼而舞。云云。○此句意ハ。琴の画讚あり。世琴や。誰人の弾む。を。む。し。の。漢。声。よ。梁。上。の。莖。で。も。く。く。ハ。漢。顔。よ。ハ。鳥。巢。を。色。感。と。し。あ。ま。し。と。琴。は。徳。を。林。ち。し。と。鼓。を。と。じ。る。少。女。を。此。入。物。か。う。く。琴。の。聲。と。入。て。を。と。び。か。き。な。ら。さ。ば。も。も。を。ち。り。あ。ら。う。も。強。く。し。し。と。鼓。の。句。に。ハ。あ。づ。ま。き。し。し。と。磨。鼓。

○卷第一

後系飛鳥よ。まの影くるといふ。ゆや。準らら。事と
はす。ぬ文語之。又是程の。義のみにま。はら。しや。
千鍛み。の。ど。琴。を。い。ふ。花。も。吹。流。し。此。花。も。も。え。
え。し。の。風。積。拾。ふ。之。画。讃。の。句。幹。也。去。那。が。画。讃。と。い。ふ。
懐。有。る。證。跡。何。ら。也。河。老。の。集。み。之。又。之。ど。○。然。る。に。
往。し。年。明。和。於。二。六。菴。竹。阿。坊。四。國。九。州。の。行。脚。終。り。て。
歸。心。せ。家。よ。此。説。の。檢。校。き。よ。ま。の。せ。に。一。閱。し。て。も。
こ。み。て。う。ら。し。日。此。琴。實。の。中。せ。り。我。四。國。の。漂。泊。乃。此。
伊。豫。の。國。松。山。の。河。某。の。家。に。借。り。三。幅。對。乃。軸。物。あ。
り。ば。向。を。中。め。て。右。の。其。角。左。の。素。堂。也。予。左。右。の。向。を。問。ふ。

まの影くるといふ。明和。春。す。み。や。う。の。信。で。り。と。あ。る。の。
松。山。の。河。某。の。家。に。借。り。三。幅。對。乃。軸。物。あ。り。ば。向。を。問。ふ。
其。角。素。堂。

樂器三幅對 画 探雪筆

左 太鼓

青海やを鼓ゆる。素堂

中 琴

ち家も好や。芭蕉

右 笙

逐鳳凰

り。の。相。乃。其。角。其。角

やにおしそ 予 始て敬表す。可持の人名いさしり故障りけむ
 略しらくいよめ多にすし出さず。予の言予の方にあり。歌
 人の身もつえんばし。嗚呼幸哉

贈物 柳の志ちあひ哉

解云云と云せり云云(のへ下知の詞をあれんは
 亦兼合はするはより上にさたれんを下也

云云(と云てより上よるこ
 あれんは非云云云云
 とるは非云云云云
 ても云云云云云云

袋 云此句ハ柳の嬌うある人向の才に勝へていそく贈物なり
 にしれりめはりるつ指し是等物やさしれ勝ゆきさる句
也 **解** 云許六々多法師小腫物みさる柳と云る蘇の短冊也
 可持とり諸集に出る下のさるる誤と記きり按きみさる柳
 ち云初の案ありて柳はさるる例乃再案の指肯と云る

け句法玉連環体口受 ありて詩奇連俳と云にけし尔集なる
 事し林 け句で出さる

説 **袋** ぬしくれ立法正直也 **解** 友品の事。危よ。去来抄

を引てあかす。又句法の事ハ。後世好事の媚あり。蘇の此
 法をきくこと。あらば。支考。去来。許六。河と云らるん
 や。是もこれ澄據也。詩法。あかばらに。用る小色不及事也。
 又云此の尔集詩奇連俳云と。詩に尔集と云事不聞。
 五老井和訓唐詩解あり。倭人の詩よの尔集あり。唐人
 の詩よの尔集なるを海に垂り。爰に云の倭人の
 詩れり云。又連歌少色。詩句の法也。句作可不用事

何れやと。諸宗匠に聞かざるも。中しき。
 句案に。詩句の法を合せて。考つし。却て句縮して。
 句を。幽玄辭出。解。○又。幽玄の解。解。
 字。陀法。師の法。を。奉。奉。柳の。さ。さ。を。粘。青。と。稱。
 て。五。連。環。成。を。と。句。法。を。考。と。つ。は。ず。是。許。六。が。意。義。
 柳。の。志。を。以。て。許。六。の。法。を。考。と。つ。は。ず。正。統。の。法。を。考。と。つ。は。ず。
 と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。
 柳。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。
 隔。句。法。を。考。と。つ。は。ず。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。

用いぬ事也。支を却て。再案の粘青を。推量の解
 をつげ。何れやと。諸宗匠に聞かざるも。中しき。
 句案に。詩句の法を合せて。考つし。却て句縮して。
 句を。幽玄辭出。解。○又。幽玄の解。解。
 字。陀法。師の法。を。奉。奉。柳の。さ。さ。を。粘。青。と。稱。
 て。五。連。環。成。を。と。句。法。を。考。と。つ。は。ず。是。許。六。が。意。義。
 柳。の。志。を。以。て。許。六。の。法。を。考。と。つ。は。ず。正。統。の。法。を。考。と。つ。は。ず。
 と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。と。い。は。れ。た。り。

是ハ予ハ誤傳スルニ至ル史邦ハ小文庫ハ柳の山り類と

てく此の後世あり。乃節を媚ふ。好事の人。連玉環
轉ふ。句法をまれば。乃の横合と成りて。害ありん
と。然。亦も思ふ。所なき。然も。道地多くするの
心術。又及ふ。あかし。又翁のちた大切の柳一も去来小
つげ。句法と中さけ。然も。来る。す。あ。ち。せ。然の
胸も徹し。くじも。亦知。へ。す。此句詩六（前）え。せ
き。や。年月もかけ。ま。ど。ち。ち。ち。あ。好。も。定。あ。後
と。い。む。夢。ち。が。宮。初の吟。再。案。此。吟。と。わ。て。あ。り。こ。こ。
推量の沙。法。あ。一。己。あ。り。ん。矩。と。な。し。難。し。い。づ。れ。也。
い。づ。も。あ。わ。し。し。か。し。し。不。冷。何。あ。色。せ。よ。さ。ら。る。柳。柳。の

さ。つ。る。ど。ら。ら。色。句。意。の。回。る。也。後。物。が。柳。へ。さ。ら。り。た
ら。ん。の。意。を。書。く。難。し。志。ら。す。む。じ。い。句。意。の。い。さ。し。も
さ。つ。ら。か。し。面。の。好。む。さ。め。了。解。し。重。ん。害。あり。後
い。づ。も。あ。わ。し。し。か。し。し。不。冷。何。あ。色。せ。よ。さ。ら。る。柳。柳。の
外。古。傳。を。し。候。の。潤。色。と。知。る。べ。し。

○清く此柳の。あ。み。あ。を。思。ふ。こと。今。年。三。十。餘。年。経。
し。寶。曆。の。は。り。め。夏。の。晴。の。夢。に。老。僧。卒。然。と。あ。り
て。曰。と。こ。け。年。月。は。柳。を。あ。み。し。感。あり。よ。く。知。む。と
あ。ら。ん。右。の。拂。子。を。持。左。の。膝。蹴。め。り。し。乃。は。し。し。柳。の
あ。み。も。初。め。の。あ。ら。ん。い。は。い。是。を。あ。み。は。り。め。さ。ら。に。傳。説

如也揚柳み比しき常より多き柳乃泥みまきくとの作也

林解 此句を出し候

説袋 もかり。邪妄之。異人のことけり。みかんとや。笑而
断。腮。と云これ。是等れ事之。異端を攻ふに害ありと
し。とも。初葉の。みか逆んを解く。○木の柳は川を
の柳。まき。水多く。ひちて。まはる。た。まの。汐。干。みは。
あづ。う。ふ。泥。く。く。し。此泥に。た。く。と。ふ。不。能。消。
の。や。し。も。か。家。事。を。ま。ま。お。お。翁の。心。骨。を。た。ら。い。
し。邪。智。を。弘。ち。し。と。候。魔。道。と。し。其。是。み。道。屋。
く。候。可。恐。々。

来曾のまきけく雪也。生みぬ。春は草

袋 云題のまきけく雪也。是は交仲の墓を又の繪濃よりしり
へ。一句の心は来曾後の素姓遠きに隠藝をくひり。時
を得て勃真一名を一天に放りし。雪也。生みぬ。春は
乃。く。く。雪。の。信。濃。の。雪。圃。多。く。来。草。の。た。と。一。也。也

林解 此句を出し候

説 け注をふく。邪推妄説不可用也。例の入が。初ら
みやくの病り。情ナカケの字を。解ト。素姓氣性みか
候。此句の情と。し。春。の。陽。氣。發。生。

